



優秀作品集

国際理解・国際協力のための
作文・感想文コンテスト

2011

日本国際連合協会山口県本部

序

国際連合(国連)は、世界の平和と経済・社会の発展のために協力することを誓った独立国が集まってできた機関で、現在 193 カ国が加盟し、日本は昭和 31 年(1956 年)に加盟しました。

山口県では、昭和 27 年(1952 年)に「県民の運動として国連の目的実現に協力すること」を目的に、日本国際連合協会山口県本部を設立して以来、県民の皆様に国際社会の平和や安全をはじめ貧困等の諸問題を身近に考えていただき、国連の役割や国際理解を一層深めていただけるよう活動を行っています。このうち、「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」、「高校生による国際交流体験感想文コンテスト」では、県内から多数の御応募をいただきました。その中から、優秀な作品を選び、この作品集に掲載しましたので、ぜひご一読ください。

日本国際連合協会山口県本部 本部長 江里健輔



優秀作品表彰式の様子(平成 23 年 11 月 19 日、山口市にて)

<日本国際連合協会山口県本部について>

主な活動内容

- 「国際理解・国際協力講演会」等の開催
- 各種コンテストの開催
 - 「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」
 - 「高校生による国際交流体験感想文コンテスト」
 - 「外国人による日本語スピーチコンテスト」
- 「国連展」の開催

ホームページ

<http://www.unaj-yamaguchi.jp/>

国際理解・国際協力のための作文・感想文コンテスト2011

優秀作品集

目次

中学生の部	第51回	国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト
-------	------	-------------------------

最優秀賞(県知事賞)	もしも私が国連職員なら				
	山口大学教育学部附属山口中学校	3年	渡辺 愛	2	
金賞(ユネスコ賞)	もしも私が国連職員なら～未来を築く子ども達のために～				
	県立高森みどり中学校	1年	中本 千佳	4	
銀賞	もしも私が国連職員なら				
	山口市立潟上中学校	2年	原田 暖子	6	
銀賞	世界の平和と安定のために国連がすべきこと				
	県立高森みどり中学校	1年	田村 佳愛	8	
佳作	もしも私が国連職員なら				
	周南市立岐陽中学校	1年	長尾 祐太	10	
佳作	世界の平和と安定のために国連がすべきこと				
	県立高森みどり中学校	3年	弘田 哲志	12	
佳作	もしも私が国連職員なら				
	高水高等学校附属中学校	3年	好中 奈々子	14	
佳作	世界の平和と安定のために国連がすべきこと				
	山口大学教育学部附属山口中学校	1年	倉益 瑞季	16	
佳作	世界の平和と安定のために国連がすべきこと				
	山口大学教育学部附属山口中学校	2年	藤崎 実理	18	
佳作	世界の平和と安定のために国連がすべきこと				
	～対内的に動くこと～				
	山口大学教育学部附属山口中学校	3年	和崎 竣平	20	

高校生の部	第 18 回	高校生による国際交流体験感想文コンテスト
-------	--------	----------------------

最優秀賞(県知事賞)	真の国際人とは？ ～アジアユース人材育成プログラムに参加して～	山口県立下関中等教育学校	5 回生	奥村 素生	24
金賞(ユネスコ賞)	自己主張の精神	慶進高等学校	2 年	鋤崎 有里	26
銀賞	目配り 気配り 心配り	サビエル高等学校	1 年	仁井山 智香	28
銀賞	アメリカで得たもの	萩光塩学院高等学校	2 年	中司 優里	30
佳作	「私の国際交流」	山口県立下関中等教育学校	6 回生	大久保 奈緒	32
佳作	自分に課せられたもの	高水高等学校	2 年	村上 愛	34
佳作	世界という宝石箱	慶進高等学校	2 年	潘 佳真	36
佳作	国と国との距離 心と心の距離	サビエル高等学校	1 年	小西 こなつ	38
佳作	はじめての国外脱出	サビエル高等学校	1 年	竹内 彩	40
佳作	「国際交流の大切さ」	萩光塩学院高等学校	2 年	山根 真悟	42

第51回

国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト



優 秀 作 品 集

最優秀賞(県知事賞) 「もしも私が国連職員なら」

山口大学教育学部附属山口中学校3年

渡辺 愛(わたなべ あい)さん

髪の色、肌の色、目の色、言葉。私とは全てが違った。私は、小学二年から一年半、アメリカで生活した。私が通っていた現地の小学校での最初の印象がこれだ。しかし、言葉が通じなくても単語を教えてくれ、手をひいて教室まで誘導してくれた。笑いかけてくれ、ハグもしてくれた。とてもフレンドリーだった。この時、言葉が通じなくても誰とでも仲良くなれると思った。しかし、現状はどうだろうか。世界のどこかで戦争が起こっている。罪の無い人達が亡くなっている。病気や飢えた子ども達がたくさんいる。なぜ大人になって国規模になると皆仲良くできないのだろうか。私は幼い頃から戦争のアニメや話を聴く度、単純に「世界が平和だったらいいのに」と思ったものだ。

そしてニューヨークに行った時のことだ。国連本部に行った。そこには銃の口が結んであるモニュメントがあった。私が望んでいることをそのまま表しているようだった。そのモニュメントは今も私の脳裏に焼きついて離れない。

今年の修学旅行での沖縄。そこでまた、悲惨な戦争の傷跡を見た。そして私は決心した。もう二度と同じ過ちを繰り返してはならないと思った。たった半世紀前、たくさんの人々が戦争で犠牲になった。また今もなお、その戦争におびやかされている人達がいる。私が国連職員なら、まず戦争をなくす努力をしたい。そのために戦争国の考えを変えることが大事だ。暴力で物事が解決する訳がない。それが分からなければ戦争はなくせない。では、どうすればいいのか。私だったら話し合いの場をたくさん設ける。当事者どうしだけだといがみ合うかもしれない。だから第三者に仲裁を頼む。私達も部活動で何度ももめ事を経験した。主張をゆずらない者どうしでも、周りの皆で意見を出し合い、妥協点を見つけた。子どもにもできるのだから、絶対にうまく行くはずだ。もう一つの方法として、核兵器や武器をなくすことだ。武器がなければ

戦争は起こせない。自国を守ると言い訳をして、核兵器を作る。力を見せつけようとするだけに違いない。世界中の人々の命をおびやかしてまで作り続けるのか。私には理解できない。争いがなくなれば全ての武器は不要だと思う。私はその争いの原因を究明することが最も大事だと思う。宗教の違いや資源を求めての争い。原因は色々あると思う。しかし、全ては話し合っただけで原因をつきとめれば解決できるはずだ。そして、二度と同じ理由で戦争が起こらないように対策を考えるべきだ。そうしたら、同じ理由で戦争は起こらなくなると思う。

もう一つやりたい事がある。それは、アフリカの飢餓で苦しむ人々を助けることだ。その飢餓をなくすためには、作物を育てる技術を手助けすることが一番だと思う。砂漠化して作物が育ちにくい環境でもある。しかし、日本人はもともと農耕民族だ。太古の昔からの経験を活かして、農業技術者をたくさん派遣する。その土地に適した作物を考えることも重要だ。そしてその技術を根付かせて、代々伝えていく。そうすれば、何があっても乗り越えられるのではないか。

戦争をなくす努力も、アフリカの飢餓で苦しむ人々を助けるにも、対話が絶対必要になってくる。だからそのためにも私は英語を勉強しようと思う。英語をマスターすれば、世界中の半分の人と会話ができる。色々な価値感を学ぶことも大切だ。世界中の様々な思想を理解することでお互いを認め合える。会話を繰り返すことで、相手の意見を尊重できるようにもなる。今、私には世界を変える力はない。しかし、世界で苦しむ人々のことを忘れずに、今できることを精一杯やりたい。世界中の人が笑顔になるように祈りながら。

金賞(ユネスコ賞)

もしも私が国連職員なら～未来を築く子ども達のために～

県立高森みどり中学校1年

中本 千佳(なかもと ちか)さん

私は、国連の職員として戦争をなくすことも大切ですが、未来を作るのは子ども達なので、今の子ども達に教育や将来必要なことを教えることも大切だと思います。

私が、もしも国連の職員だったら、世界中で困っている人々や子ども達のためにしたいことが四つあります。

一つ目は、学校に行かれない子ども達に、勉強を教えてあげることができる場所をもっと多く作りたいということです。

なぜかという、戦争をしている国の子ども達は学校に行くことができず、大人になっても就職できないと聞いたからです。そのことが、その国の人々の生活の悪化に繋がっていると考え、そのようなことが起こらないためにも、勉強をする機会を増やすことが必要だと思いました。

二つ目は、食料不足や栄養失調が問題となっている国々に行き、野菜や果物など栄養の高い食物の作り方を教える機会をたくさん設けたいということです。

私は、食料不足や栄養失調が問題となっている国々で、野菜や果物を栽培することが、その問題の解決に繋がると思ったからです。しかし、その土地や気候にあった食物が、すぐには見つからないかもしれません。でも、国連という世界的規模の組織だったら何か必ず良い方法が見つかり、その国を救うことができると思います。

三つ目は、戦争がまちがっているということを、特に子ども達に教えていきたいということです。

なぜかという、戦争中の子ども達は大人達から「人を殺すことは、戦争においては正しいことなんだ」というようなことを教えられているのではないかと思ったからです。実際に、戦争中の日本もそうだったようです。そのようなまちがった考えを教えられた子ども達は、兵士として進んで戦争に行き、大きくなっても戦争を始めるき

っかけを作ることをすると思います。私は、このことが、今まで戦争が無くならない原因の一つだと思うので、戦争はまちがっているということを子ども達に教えていきたいです。

四つ目は、危険な仕事や労働をさせられている子ども達を少しでも減らしていきたいということです。

世界では、子どもの約六人に一人が危険な仕事や労働をさせられていると聞きました。私は、そのような命に関わることを子どもにさせているのはまちがっていると思います。そのまちがったことをさせないためにも、国連が全力で子ども達を守っていく必要があると思いました。

これからの未来を築くのは、兵士として戦争に行かされたり、労働作業をさせられたりしている子ども達も、私と同じこれからの地球の未来を築く者たちです。

そのような悪い環境におかれている子ども達がいるのは、大人の責任です。だから国連には、これからの未来を築く子ども達を守り、より良い環境の中で育てる役目があります。また、大人達を変えていく役目もあります。

世界中の国の人々が幸せになることを願って作られた国連は、今の世界に必ず必要だと思います。私は国連の活動の中でも、専門機関の「ユネスコ」との協力で子ども達のために多くの活動をしていることに関心を持ちました。

私は将来、世界で活躍する人になりたいと思っています。まだどんな分野で活躍したいかは、決めていません。でも、「もしも私が国連職員だったら」ということを考えることによって、国連の職員のように、世界の人々が幸せになるような仕事につきたいと思うようになりました。

そのためにこれから私は、世界の人々とコミュニケーションがとれるようになるために、英語をがんばっていきたいです。

銀賞

もしも私が国連職員なら

山口市立潟上中学校2年

原田 暖子(はらだ あつこ)さん

幸せとは何だろう。「物質的に恵まれていること」、これも一つの幸せなのだろう。蛇口をひねれば水が流れ、スイッチを押せば明るい光が灯る。私は、暮らしていく上で不便なことなどないくらいに快適な生活を送っている。しかし世界には、わたしたちにとって当たり前のこの便利さとかけ離れた暮らしをしている国々がたくさんある。「国連」では一国では解決困難な問題に多く国が協力して取り組んでいると知り、私は深く感動した。

今年三月、突如日本を襲った「東日本大震災」。現在もなお、その悲劇から立ち直れないでいる人々も大勢いる。言葉にできない苦しみを心に抱えていらっしやるだろう。そんな人々の悲しみに寄り添い、支えてあげたいと思うのは私だけではない。世界中の人々がそう思ってくれているはずだ。「国連」でも、「できることは何でもする」というほどの思いで援助活動を行ってくれたという。私は日本国民の一人として、日本を支援してくださった全ての方々に感謝している。

しかし一方で疑問に思うこともある。なぜ私たち日本を見てくれた温かな目で、慢性的な貧困問題や人権問題を抱えた国々、内戦や紛争の続く国々を見ないのかということだ。確かにこの度日本は未曾有というほどの大災害に襲われたが、世界にはもっともっと深刻な状況にあえぐ国々が数多くある。私たち日本人も含め、そのような国々から目をそらしているのではないだろうか。支援は行われているのだろう。しかし、支援が全く足りていないことは確かだ。また、どれだけ支援しても、現地の人々が「自分たちも頑張ろう」と思っていなければ意味がない。国を変えていくためには、その国民が自分たちの力で問題を解決していこうとする強い意志が必要だ。

私は国連職員なら、やらなければならないことが二つある。

一つめは、「支援の輪を広げ、絆を強くするための広報活動」だ。単に物質的な支援

だけでは本当の支援ではないと思う。心に寄り添う支援が必要だ。世界にはどんな国がありどんな人々が様々な問題を抱えながらも懸命に生きているのか、その姿をしつかりと世界に発信したい。現地に出向き、現地の人々の生の声を聞き、様々なメディアを活用して世界中に伝えたい。一人一人が他の国の人々の悲しみや願いを自分のこととして考えることができたなら、広い世界でも少しずつ絆を固くしていけるはずだ。他の国への関心が深まることは世界が一つになる第一歩だと思う。

二つめは、「教育を充実させる活動」だ。人間が人間らしく生きていくために、そして自分の国を支えていくためには、知識や技術を身につけなくてはならない。「国連」や他国からの援助を受けながらも、最終的には自分たちの力で国を支えていく強さをもった国民にならなければならないからだ。「国連大学」という機関があるが、現在は学術的に高度なことを研究する大学院である。その機能をさらに広げ、世界中の教師を目指す若者たちの学ぶ場にしていきたい。そこでともに学び、心の絆を結んだ世界中の仲間たちが、やがて自国に帰り、子供たちを教える先生になる。世界平和という「国連」の理念を身につけた先生たちが、各国の子供たちに豊かな教育を授けるのだ。子供たちは広く社会について学び、偏りのない考え方を身につけることができるだろう。世界中の子供たちが自分の国の未来に夢と希望を抱き、前向きに生きていける世界をつくっていきたい。

宇宙飛行士の言葉に、「宇宙からみた地球には国境がない」というものがある。そんなひとつの星の上で、私たちは肩を寄せ合い生きている。しかし、時に私たちは互いに争い傷つけ合ってきた。心に国境があったのだ。国境を越えた一つの平和な世界を創るために懸命に働く、そんな国連職員に私はなりたい。

銀賞

世界の平和と安定のために国連がすべきこと

県立高森みどり中学校1年

田村 佳愛(たむら かえ)さん

テレビのニュースで、よく国連という言葉聞きます。その時のニュースでは、世界各地で起きている戦争や紛争で、多くの罪のない人たちが犠牲になっていると、悲しい内容が多いように思い、このテーマを選びました。でも私は、国連について何も知らないのです、まず国連について調べることにしました。

父に国連のことを聞くと、「約七十年前に第二次世界大戦という大きな戦争があり、日本も多くの人が犠牲になった。その過ちを繰り返さないために、設立された国際機関で、役割など詳しいことはインターネットで調べてみると良いよ。」と、教えてくれました。調べてみると、国連とは、国際連合の略で、その目的は、国連憲章に次の三つが書かれていました。

- 一「国際平和・安全の維持」
- 二「諸国間の友好関係の発展」
- 三「経済的・社会的・文化的・人道的な国際問題の解決のため、および人権・基本的自由の助長のための国際協力」

これだけではよく分かりにくいですが、国同士の戦争の仲裁や、また戦争を始めないか監視活動と、開発途上国への経済・技術支援、干ばつ等による飢饉対応としての食料支援、学校の設立など教育支援などを実施している事が分かりました。

現在も世界の各地でいろんな問題が発生しています。パレスチナ問題、エチオピア紛争、ソマリア内戦、イラク問題、チベット独立運動などです。原因は民族・宗教問題と、いろいろあるようですが、戦争の直接的な犠牲だけでなく、食糧・医薬品不足で沢山の子どもたちが死んでいることが、とても悲しいと思いました。一部の人たちが、自分たちだけ豊かになりたいため、紛争・戦争を起こし、その犠牲になっていると思いました。

また父は、「日本では食糧・物資も豊かで、不自由の無い生活をしているが、決して他人事ではない。」と、言っていました。日本は資源が少ないので、本当なら日本だけでは、こんな豊かな生活はできない。他国の資源を使って豊かな国を作っている。もしも資源を供給してくれる国で戦争や干ばつ・飢饉が起きて不安定になると、日本に資源が入らなくなり、日本もやっていけなくなる。戦争に巻き込まれるかもしれない。それを防ぐために、地球に住むすべての人々が、平等で豊かな生活ができるように、日本も技術先進国として、国際社会に協力していると、教えてくれました。

いろいろと勉強していく内に、国連の一番重要な役目は、「戦争が起こってからの対応」ではなく、「紛争が起こらない国際社会作り」だと思いました。国連は、飢饉に対して、国際食糧農業機関や世界食糧計画、教育に関しては国連教育科学文化機関（ユネスコ）、健康に関しては国連児童基金（ユニセフ）、世界保健機関（WHO）など、各国の支援をおこなっていることも分かりました。また経済・産業の発展を支援していることも分かりました。このような国際協力・支援の継続が、世界の平和と安定のために国連がすべきことだと私は思います。これから、日本ができること、私ができることが何かを、もっと勉強していきたいです。

私の通う高森みどり中学では、三年生になると、海外語学研修でオーストラリアに行きます。国際社会では英語が共通語と、いつも父が言っています。将来私が国際社会において何ができるか分かりませんが、英語の勉強も頑張っていきます。

佳作

「もしも私が国連職員なら」

周南市立岐陽中学校1年

長尾 祐太(ながお ゆうた)さん

ぼくは、「もしも私が国連職員なら」というテーマで、水不足の国について調べました。

今、開発途上国では、安全な飲み水さえ確保できない人々が多数います。また、世界では急激な人口増加や経済発展などにより、水不足や水質汚濁、水災害など水資源にかかわる問題がますます深刻化かつ多様化しています。

現在、世界の人口の三分の一にあたる人々が、水不足に直面しており、八億人以上が安全な飲料水を利用できない状態にあります。また、水関連の病気で子供が八秒に一人ずつ死亡し、開発途上国における病気の原因の八割は汚水にあるとされています。

ぼくは、もっと早く世界が協力したら、こんなことにはならなかったんだろうなと思いました。

この、水資源にかかわるさまざまな問題は、国際的に取り組むべき課題で、近年世界的な対応も活発しています。

安全な飲料水は人々が生きていくためには必要不可欠であるにも拘わらず、世界では約9億人の人々が安全な飲料水を入手することができず、毎年百八十万人の子供が下痢で死亡しています。

毎年百八十万人の子供が死亡することを知った時すごく子供達がかわいそうだなと思いました。

そして、やっと水不足の場所に井戸や浄水場や給水施設をつくる計画がたてられました。しかし、水不足のところは一つではなく多数だったため、すごく費用がかかったそうです。

これで、一応問題は解決しましたが、衛生的な生活習慣を身に付けなければなりま

せん。今は、食事前の手洗いやトイレの普及が行われるようになり、衛生状況が改善されつつあります。

最近の家は災害にそなえて厚いかべでおおわれている家もあり、防災グッズもあるそうです。

災害が一番多い地域が東南アジアで三十三パーセント、二番目が南西アジアで三十一パーセント、三番目が中米・カリブで十パーセント、四番目が南米と大洋州で七パーセント、五番目が中近東で五パーセント、六番目が東アジアで四パーセント、七番目がアフリカで三パーセントでした。

主な災害の種類で一番多かったのは、洪水で四十八パーセント、二番目が地滑りで二十パーセント、三番目が地震で十二パーセント、四番目が熱帯性低気圧で九パーセント、五番目が津波で八パーセント、六番目が火山で三パーセントでした。

三月十一日の東日本大震災で災害を受けて地震はいつくるか分からないから気をつけないといけないなと思いました。

ぼくは、この資料を読んで国際協力とはすごく大切だなと思いました。理由は貧しい人達を助けてあげられるのは一人ではなく、世界中のみんなだからです。水不足だって、みんなが助け合って解決できたことで、決して一人では無理だったと思います。今日、こうやって学んだことをこれからの生活に活かし、大人になってもこの国際協力ということをわすれないようにしたいです。特にぼくが国連に入ったらこれは絶対にわすれず、もう一回読み、国際協力がどれだけ大事か、そういうことを思いながら読もうと思います。そして、こういう身近な生活からコツコツとみんなと協力して生活したいこうと思います。

佳作

世界の平和と安定のために国連がすべき事

県立高森みどり中学校3年

弘田 哲志(ひろた さとし)さん

国際連合は、平和の維持、経済や社会などに関する国際協力の実現を目的として活動する組織です。現在の加盟国は193カ国で世界のほとんどの地域を網羅している組織です。

経済的、社会的、文化的、人道的な国際問題の解決のため、および人権・基本的自由の助長のための国際協力を達成するため、総会やニュースなどで耳にする安全保障理事会などが開かれています。その中の記事で、僕が一番気になったことは、内戦による食料危機や発展途上国の児童労働の問題です。世界では多くの子供たちが生きていくために働かなければならない状況です。僕が目にした内容は、ガーナの児童労働についてでした。政治的には安定していても、児童労働が127万人もいるという調査結果が伝えられていました。この国の児童労働の原因は、学校が整っていない、学校そのものがない、学校が遠い、先生がいなくて学ぶ機会が与えられていないことが大きいといわれています。また、貧しい家庭が多いので、親も学校に行き勉強するよりも働くことを望んでいるというのです。

僕たちは当たり前のように小学校、中学校で学んでいます。お昼になれば給食も食べ、時にはおかわりまでさせてもらっています。清潔な家に住み、便利な生活をし、旅行をしたり娯楽を楽しんだり。そんな生活が当たり前の日本では、ガーナのように学校に行かずに働くということは自分にとって考えられないことです。でも、アフリカの子どもたちの大半は、その日の食事すら満足にできない状況にあります。生きるためには、学ぶことより食べること。食べるためには仕事をするしかないのでしょう。それも、僕たちが想像するよりはるかに労働条件も悪く、中には子供兵士、児童買春、坑内作業など危険で劣悪な環境の中での仕事を強いられているというのです。僕よりはるかに小さな子供たちがそんな状況のなか暮らしている国があると聞いてとても

胸が痛みました。

何とか彼らを救う手立てはないのか。国連でも、各国に呼びかけて途上国に学校を作ったりしています。いろんなボランティア、医師、先生など志を持った方々がいろんな国に行かれています。電気もない何も無い国へ行って、僕にはボランティア活動ができるだろうかと考えることもありますが、一人で行動に移すのは難しいです。やはり、みんながこの現状を知ることだと思います。子供たちの悲惨な現状を知れば、何かしら声があがるのではないのでしょうか。日本の政府でも児童労働をなくそうという計画を作ることを求める署名を募集していると聞きました。ほかの国のことだと無関心にならず一緒に伝え活動する仲間を増やすことが一歩です。あと日本が国連の安全保障理事会の常任理事国になるということも必要なのではないかと思います。この安保理で議決権を持つのは、常任理事国の5か国と非常任理事国の10か国だけです。現在常任理事国になっているのは、アメリカ、イギリス、フランス、中国、ロシアです。一方、非常任理事国の10か国の任期は2年で、1年ごとに半分の5か国が改選されます。常任理事国と非常任理事国では与えられた権限が違います。日本は加盟国中最多となる10回の非常任理事国を勤めてきました。でもなかなか常任理事国入りができないのです。ぜひ、常任理事国の仲間入りをして、日本の声を国際社会に反映させてほしいと思います。そして、一日も早く世界中の子供たちが平和で安心してらせる、平等に学べる環境づくりをしていくことが理想です。

佳作

もしも私が国連職員なら

高水高等学校附属中学校3年

好中 奈々子(よしなか ななこ)さん

私はこの夏、奈良県で行われたユネスコ子どもキャンプに参加した。

参加者は小学生が多く、最初はなかなか自分の班になじむことができなかった。話し相手のいない寂しさから、私は別の班で行動するという自分勝手な行動をとっていた。その時、注意をされても当然なのにスタッフの人は「もう慣れた？」と逆に私を気遣って下さった。周りの気持ちも考えずに自分勝手な行動をとった自分を本当に恥ずかしいと思った。

一日目は何度も「早く帰りたい。」と思ったキャンプだったが、最終日はみんなとの別れが辛く涙が出た。四日間のキャンプ生活が私の心を大きく変えていたのだ。スタントの練習が上手くいかない時には、年下の小学生を相手にして本気で自分の思いを伝えたこともあった。キャンプで学んだのは、仲間を認め受け入れる心や表面だけでなく心から人に向き合う勇氣、そして共に助け合うことなど、人と関わって生きていくことの大切さだった。

だから、もしも私が国連職員なら、世界中の子ども達を集めて『ユネスコ子ども地球キャンプ』を開催したいと思う。

国連の様々な活動を思う時、私はキャンプのスタッフの果たす役割に似ているように思う。顔も年齢も出身地も違うバラバラな私達を、スタッフは見守り結びつけてくれた。それと同じように世界にはたくさん人間がいて国も民族も言葉も様々だ。宗教や習慣、文化、価値観、そのあらゆる違いを受け入れ認め合うために、人と人、国と国を結びつけているのが国連の活動ではないだろうか。そして、戦争や貧困、飢えや病気、差別や環境問題などの人類の問題を共に解決するために、人と人、国と国を結びつけている。

地球キャンプでは、私が奈良キャンプで学んだように、人が共に生きていくことの

大切さを知り、仲間を認め受け入れる心を育ててほしい。そして世界中の子ども達に本当の笑顔や生きる尊さを感じてほしいと思う。

けれど現実には、戦争や病気で生きることだけで精一杯で、キャンプどころではない子ども達の方が世界には多いのだ。貧困、教育、健康など、どれをとっても大変な問題で、解決には多くのお金や時間がかかることだろう。

だからこそ私が提案したいのは、「人」を育てる地球キャンプなのだ。人類のあらゆる問題を作りだしたのは私達「人」だ。その問題を解決していくのは、やはり私達「人」でしかない。世界各地でこのキャンプを行い、「問題を解決するのは、人と人、国と国が協力し合う関係を築くことが大切だ」と、自分の肌で感じる体験を多くの子ども達が共有すれば、地球の未来は少しずつだが確実に変わっていくにちがいない。

世界各地の地球キャンプで育った子ども達は、地域を育て、国を育て、平和を生み出していく。また、国連の活動を担うスタッフや国連ファミリーとなって、世界中で活動に取り組むことだろう。

現在私達の学校ではユネスコの活動として、平和について学習したり、異文化交流をしたりしている。また、感染症予防のワクチンを買うための募金活動や廃品回収も行っている。今私達ができることはこのような小さな活動だが、一つ一つの小さな積み重ねが、世界を理解することにつながり、地球にあるたくさんの命を守ることになると信じている。

来年は私の住む山口県でユネスコ子どもキャンプが行われることになった。今度は私もスタッフとして参加する予定だ。人と人とを結ぶ国連キッズとして活躍するつもりだ。

この青い空はどこまで続いているのだろう。私はこの空に続く広い世界をまだ知らない。だからこそ、まだ見ぬ世界とつながっていくために、私は今身近にいる人と仲良くし、互いに協力し合う人間関係を作っていくことを、どこまでも続くこの青空に誓う。

私達はこの地球に一つテントを張るキャンパーなのだから。

佳作

「世界の平和と安定のために国連がすべきこと」

山口大学教育学部附属山口中学校1年

倉益 瑞季(くらます みずき)さん

私は、八月六日、七日に父と広島であった親子ピーススタディに参加しました。今回は二回目の参加です。

一日目は、戦跡めぐりや慰霊碑めぐり、広島平和記念資料館の見学、灯ろう作りをして夜に流しました。

二日目は、被爆者の方から体験談をお聴きしたり、原爆詩の朗読をしました。

原爆は、大量殺人を目的とした恐ろしい核兵器です。その原爆によって、一瞬のうちに何十万人もの尊い命が奪われると同時に「ヒロシマ」の街は家や草が焼き尽くされて、破壊されました。そして原爆の被害は、その時だけで終わることなく、放射能によって、何十年も人間の体、植物などに被害を及ぼしたり、六十六年経った今でも、多くの人達が放射能の後遺症で苦しんでおられます。

被爆者の方からは、「核兵器が人類の破滅をもたらし、人類とは共存しない兵器であること」や「戦争が多く命や愛する家族・友人・財産を奪ってきたこと」「命の大切さ」について声を震わせながら一生懸命話される姿を目に焼きつけながらお聞きしました。

私は、絶対に体験・経験したくない、こんなに恐ろしい核兵器なんて世界中から一つ残らずなくなればいいのにと思いました。

小学生の時も、学校で「戦争の悲惨さ」や「平和の尊さ」を学んだり考えたりしましたが、その時で終わるものではないことだと思います。

先日、テレビのニュースで広島と長崎の高校生が平和大使となって、国連本部へ「核兵器禁止条約」の早期実現を求める署名八万筆を持って訪れたという報道を見ました。

私は、この署名活動について、生協の平和のつどいに参加した時に知りました。ピ

ースサポーターさんから、今、世界中には二万発以上あり地球が三回滅んでも余るほどの核兵器が存在していることと、その核兵器なくすために署名活動があることを聞きました。

二〇〇八年に「都市を攻撃目標にするな (Cities Are Not Targets) プロジェクト」で私たちが住む街を核兵器の攻撃目標にしないでほしいという要請内容で署名活動をしました。その時の署名は国連本部に常設展示され、核兵器廃絶を願う私達の思いを国連本部を訪れる人々に伝えているそうです。

今回の署名活動は、二〇二〇年までに核兵器廃絶を目指して「核兵器禁止条約」の早朝実現を求めるものだそうです。

条約が締結されると、核兵器を持つことも作ることも出来なくなり、世界の全ての都市や人間は戦争で犠牲になることもなくなります。

私が今、出来ることはこの署名活動に参加することと、広島、長崎の悲惨な出来事をいつまでも忘れずにいることだと思います。

心に残っている原爆詩があります。

げんしばくだん 坂本はつみ

げんしばくだんがおちると

ひるがよるになって

人はおばけになる

(出典「小さな祈り」汐文社)

こんな恐ろしいことが三度と起こらないように、世界の平和と安定のために、国連は、「核兵器禁止条約」を採択して、締結するための交渉を一刻も早く開始して欲しいと思います。

地雷も条約を結ぶことによってなくなったように、核兵器もなくなってくれることを願っています。

私も広島、長崎の高校生のようになりたいたいと思いました。平和を願う気持ちを忘れずにいよう、小さいことかもしれないけれど私が参加できることは参加していこうと思います。

佳作

世界の平和と安定のために国連がすべきこと

山口大学教育学部附属山口中学校2年

藤崎 実理(ふじさき みのり)さん

私の国連に対する印象は「遠い存在」です。これは自分が国連のことをよく知っていないせいかもしれません。なのでこの作文を書くにあたって調べてみました。国連の重要な目的は

- ・ 全世界の平和を守ること
- ・ 各国の間に友好関係を作り上げること
- ・ 貧しい人々の生活条件を向上させ、飢えと病気と読み書きのできない状態を克服し、お互いの権利と自由の尊重を働きかけるように共同で努力すること
- ・ 各国がこれらの目的を達成するのを助けるための話し合いの場となること

などのその他いろいろ調べてみての私の考えは二つあります。

一つ目は私たち市民に近い存在になることです。これは最初に述べたように、私は国連がとても遠く感じます。もしかしたら私だけかもしれませんが、私と同じ中学生にも国連がどんなところで、どんな活動をしているのか分からない、あるいは知らない人も多いと思います。ですが、もっと市民が参加できる場を増やすことができたとしたらそんな人たちは少なくなると思います。国連では市民にも参加の機会を与え、市民もさまざまな形で参加しているということを知りました。しかし今の現状は私たち中学生などは参加することはできません。これは仕方がない部分もあると思います。ですが、もし大人が参加しようとしても取り上げられることは少ないと思います。仮に参加できたとしても、発言ができるのは代表者のみです。国連は一人一人が作っていくものだとは私は思います。なのでみんなが参加することができたら一番ですがとても難しいと思います。なので、市民が参加できる場を増やしたり、それでも参加できない人は自分たちの意見をまとめて国連に送って例え参加できなくても国連に伝えていければ同じくらいの価値があると私は思います。

二つ目はもっと市民に呼びかけをするということです。例えば世界平和だったら、私たちが平和の自覚をもつことができる何かをしてほしいということです。今、日本で呼びかけが多いのは節電や募金だと思います。これは東日本大震災が起きてから日本中のあらゆるところで取り組まれていることです。少しでも早い復興を願って多くの方ががんばっています。しかし、被災地から遠くなればなるほど意識の差が大きいように感じます。特に今は真夏で気温が高いことからエアコンの使用などでも大きく差がひらいていると思います。そこで呼びかけをする際にただ呼びかけるだけでなく、例えば自分が寄付したお金がどんな風に使われるのか知れば子どもや他にも多くの人にもっと興味をもってもらえて意識も高まると思います。

今までたくさんのお話を述べてきましたが、最後は国連と私たちが一つになることができたら一番だと思います。これは国連だけではなく、国会にも内閣にも言えることだと思います。話し合いをしてお互いが理解でき、そして協力し合っていくことができれば必ず何かが変わると思います。そして国連と私たちの距離も近くなると思います。これは、国連だけではなく、地域や友達同士、もっと言えば世界のどの国でも言えると思います。お互いを理解することができみんなで助け合うことができれば争いや飢えもなくなると思います。世界が平和に、みんなが幸せになれる日が早くきてほしいです。

佳作

世界の平和と安定のために国連がすべきこと～対内的に動くこと～

山口大学教育学部附属山口中学校3年

和崎 竣平(わさき しゅんぺい)さん

今、世界はすさんでいる。日本に住んでいる自分としてはあまり実感が無いが、それでも、テレビを見ているとテロや国際紛争などのニュースがたえない。

今、世界には、共通の話し合いの場が必要である。物事をきちんと筋道をたてて話し合い、第三者の介入などにより平等な判決を下せる場が。それがまさに、国連であると思う。

国連こと国際連合は、現在およそ百九十カ国が加盟している、国際組織の一つである。国際平和の維持や、経済、社会への国際的な協力などを目的に活動していて、世界平和の実現のためには、欠かせない機関だ。

だが、その国連も、多くの問題を抱えている。その中に、国連総会における気になる問題があった。

拒否権と呼ばれるものだ。ある事項を決議する際、それを否定することができる、いわゆる特権のようなものだ。現在は、かつて第二次世界大戦で勝利し、大国と認められたアメリカやイギリス、フランスなどの常任理事国と呼ばれる国々がその拒否権を所有している。冷戦時代には、アメリカとロシアの二つの大国が、拒否権をそれぞれ行使することによって、互いににらみあっていた。

さらに、常任理事国は任期が永続的であるのに対し、非常任理事国は任期がたった二年。常任理事国は、安定した地位で圧倒的に長く有利な政治を続けられるのである。

だが、国際会議の中で、一部の国がこのような権限を固持して良いのだろうか。第一、第二次世界大戦で勝利を収めたことは、これらの特権につながるのか。「国家主権の平等に反している」。拒否権について、このような声もある。自分もそうだと思う。拒否権があっては、常任理事国が気に入らない意見は否決され、あらゆる事が彼らの思考中心に動きかねないからである。

また、常任理事国はおろか安保理にさえ入れなかった国はどうだろうか。国際政治上で不利な状況に陥れられ、大国の前に成す術もなくなった国の最後の抵抗は、テロ支援国家へ向かうこと、あるいはそのような国を支持することだ。そのようにして国際社会に反旗を翻す国が登場することが、今後の国際平和の維持の妨げになることは、言うまでもない。

こうして、国連の加盟国内における格差も広がりつつある。先ほど挙げたテロ支援国家は別として、大国の存在も、今や会議の場における妨げであろう。とにかく、このままでは国連総会の効力は薄れるばかりだ。

そこで、この現状を打破するため、「国連改革草案」なるものが提案されている。常任理事国の数を拡大する「A案」と、任期四年で非常任理事国とは違い、選挙で改選し、何度でもなれる準常任理事国を創設する「B案」である。前者は、主に日本やドイツなど常任理事国を志望する国の、後者は、前者を支持する国の周辺の国などの支持が熱い。B案を支持する国には、周辺諸国が常任理事国となって、自国の国際的影響力が低下するのを恐れているところが多い。つまり、両案とも、各々賛否両輪なのだ。だがそれも、いずれも常任理事国においては不利な案であるので、話そのものが全く進展しないのだ。

このように、各国がゆずれないため、事情は変わらない。しかし、このままでは世界も変わらないし、平和にもならない。なぜなら、各々が自国の権益ばかりを守ろうとしているからだ。国際平和というのは単なる大義名分であり、既得権益の一つや二つも手放せないのであれば、拒否権はおろか安保理も、国連総会も、ましてや国連も根本的に存在意義を失うのである。

世界の平和のためには、国連が実際に活動する場面が多いが、「国際平和の維持」の実現の前に、各国が平等に話し合い、協力できる体制を国連内で整えるべきだと自分は思う。

第18回

高校生による国際交流体験感想文コンテスト



優 秀 作 品 集

最優秀賞(県知事賞)

真の国際人とは？～アジアユース人材育成プログラムに参加して～

県立下関中等教育学校5回生

奥村 素生(おくむら もととき)さん

「Think globally Act locally」この言葉をモットーに今夏、沖縄県でアジアユース人材育成プログラムが開催され、私もこれに参加しました。

現在、世界人口七十億人のうち、十一億人に安全な水が供給されていないとされています。そして、安全な水を飲めないために、三秒に一人の割合で子供が死亡しています。

僕がこのプログラムに参加しようと思った動機は、今日、世界的な問題である環境問題について、これまで深く考える機会がなかったからです。しかし、このプログラムで僕は環境問題だけでなく、真の国際人とは何か、ということ学びました。その具体例を二つ挙げたいと思います。

一つ目は食事の時に体験したことです。普通の料理とともに、イスラーム教の戒律により豚肉を食べられない人達用に別のメニューが用意されており、彼らはその料理を食べていました。また、断食中で食事を摂らない人もいました。僕は最初、それがあまりにも厳格に実行されているので驚きました。せっかく世界の若者が一つの場に集まって研修に励んでいるのだから、同じ食事をしてもいいのではないかと違和感なども覚えました。しかし、彼らは、当然のことのよう戒律を遵守し実行していました。彼らにとっては、豚肉を食べないことや断食は、自らのアイデンティティにかかわることだったからです。この時僕は、世界には民族や地域によって様々な文化が存在することを実感しました。また、自文化を絶対視するのではなく、差別や偏見を持つことなく、異文化を理解し受容する必要があることを学びました。

二つ目は、成果発表会の準備の時でした。その時は全員が四つのグループに分けられ、各グループにリーダーが指名されました。そのリーダー達は作業時間が過ぎても、新しい提案が出ると、直ちにリーダー会議を開いて協議していました。そして、迅速に物事を決定し、作業を推進していました。僕は彼らの活動を見て、行動力の大切を実感しました。環境問題など、国際的な問題を考えていく上で、議論ばかりしていたのでは問題は解決しません。実際に行動する人と、意見だけ唱えて何もしない人では雲泥の差があります。

では、これらの二つの事例から分かる真の国際人とは何でしょうか。英語が喋れる

人でしょうか。話が上手な人でしょうか。僕は違うと思います。英語が喋れることや、話が上手であることの根底にある「文化相対主義」の観念と「行動力」を持っていないと真の国際人とはいえないと思います。民族・文化・価値観が異なる世界の人たちと円滑に交流していくためには、そうした能力や態度こそが必要なのです。

僕は将来、環境や水のような人類にとって重要な問題を解決していく技術者になりたいと思っています。ただ、このプログラムに参加する前と後では、この将来像が違います。参加する前はただ漠然と自分が技術を開発していけばよいと考えていました。しかし、今、このプログラムが修了してからは、世界の技術者と協働して研究開発を行っていきたいと考えています。そのためには知識や技術だけでなく、「文化相対主義」の観念を持つことと「行動力」が必要であることに気づきました。

このように自分の将来像が明確になった今、このプログラムで学習した世界が直面している危機を認識し、技術者としてそうした問題に関わっていくために必要な知識・技能を身につけていきます。そして、「真の国際人」として、今後の自分の人生をさらに充実・発展させていきたいと考えています。

金賞(ユネスコ賞) 自己主張の精神

慶進高等学校2年

鋤崎 有里(すきざき ゆり)さん

六月から七月にかけての修学旅行で、マレーシアの学校を訪問した。様々な人種の生徒が在籍しており、年齢も様々で、とても賑やかな雰囲気だった。その上、民族衣装でばっちりきめて、交流会場へ歩く間にも音楽や踊りで歓迎してくれたので、偶然先頭を歩いていた私は多少たじろいだ。

学校全体の印象は「賑やか」もしくは「派手」だが、交流した生徒たちの印象は「積極的」だ。マレーシアの生徒は私たち異国の人間とも積極的に関わろうとし、プレゼントやお菓子をくれたり、しきりに写真を撮ってくれたり、一緒に写真に映ろうと言ってくれたりした。また、私たちの日本での連絡先も向こうのほうから尋ねてきてくれた。名前、年齢、住所、電話番号やメールアドレス、私たちへのメッセージなどを書いた紙を大量に配っている、社交的な男子生徒もいた。そして最も印象深かったことは、別れ際に私のパートナーが「私のことを忘れないで」と言って、パートナー自身の写真を私にくれたことだ。

私はマレーシアの生徒たちの積極性に驚いた。こんなに積極的な日本人は多くはないだろうと思った。友達にパートナーの写真をもらったことを話すと、その友達も、「日本人は、そういうことはまずしないよね。」と言った。

私は自分の写真を自分から人にあげるという行為を思いつきもしないし、たどえ思いついたとしても思わないだろう。そして修学旅行を通して、この私の思考は「日本人の控えめさ」からくるのだと思った。人から厚かましいと思われることを嫌がるあまりに控え目に振る舞いがちな日本人と、そうではない外国人との思考・行動の違いを身をもって感じる事ができた。

そして私は、マレーシアの生徒たちを見習うべきだと思うのだ。彼女たちは私にはない、良い意味での自己主張の精神を持っていた。積極的に自分の存在を相手にアピールし、知り合った相手との関係を一時的なものにするのではなく、続かせようとする。こういうことが素直にできることは、将来仕事に就いた際に有利に働くと思うのだ。グローバル化が進んだ現在、関係を持つ人間は日本人だけではない。外国人に引けを取らないためにも、自己主張の精神、まわりとつながろうとする心を私たちは持つべきだと思った。

そしてもう一つ、見習うべきだと痛感したのは言語だ。様々な人種の人々が共に暮らしているので、向こうではバイリンガルは当たり前らしい。私のパートナーも、イスラム系の女の子だったが、英語をネイティブスピーカーのごとく滑らかに話し、イスラム語も分かるようだった。しかし、同じアジア人で、年もパートナーと一つしかかわらない私は、英語を話せるとは言い難い有様だった。せっかくパートナーが私にいろいろ話しかけて教えてくれるのに、私は何度も何度も聞き返した。何度も聞き返しながら、私は自分が悔しく、情けなく思った。いざ話そうとしても、しどろもどろでパートナーを待たせてしまったりした。私は「もっと話したいことがあるのに。この感情を今表現したいのに。」ともどかしくてたまらなかった。

私はどんな仕事に就くかに関わらず、グローバルな視点を持った大人になりたいと思う。修学旅行で海外に行けたことで、異国に住んでいる人の存在を本当に頭と心で感じる事ができて、この思いが強くなった。もちろん日本がいい国になってほしいし、私のまわりの人々が幸せになってほしいと思うが、マレーシアももっといい国になってほしいし、交流した人たちにも幸せになってほしいと思うようになったのだ。地球人に近づけたということだろうか。

そして、私は異国に単純に興味がある。いろんな場所を見てみたい。いろんな人や文化に接してみたい。今はまだとても漠然としているが、私が将来やりたいことの一つだ。

グローバルな視点を持った大人になるためにも、将来様々な場所へ行けるためにも、語学は必要不可欠だと思う。そもそも自己主張も、言語に自信が持ててこそできるものだと思うが、頑張って、今学校で学んでいる英語だけでも身につけたい。今のこの新鮮な気持ちを大切に、勉強に励んでいこうと思う。

銀賞

目配り 気配り 心配り

サビエル高等学校1年

仁井山 智香(にいやま ともか)さん

今夏のホームステイ(オーストラリア)は、想像をはるかに超えるほど楽しかった。心配していたホームシックもジャパンシックも、どこ吹く風。ホストファミリーの娘になりきって過ごすことができた、まさに夢心地の二週間だった。

正直言うと、出発前は、そうではなかった。万に備えて、お米や海苔、それに緑茶やあられ、さらには日本のお菓子を大量にスーツケースにつめ込んだ。英語力も気がかりだった。

いよいよホストファミリーと対面する瞬間が近づくと、急に心臓がドクンドクン高鳴り出した。おそらく顔も青ざめていたに違いない。

緊張度120%の、そんな私を迎えてくれたのは、ホストマザー(ロビン)の「笑顔」だった。ほっとした。何ともいえないやさしいまなざしを見つめると、張りつめていた肩のこわばりが、す〜っと消え去っていた。

空港から自宅に向かう車中、ロビンは、言葉一つひとつをかみ砕くように、ゆっくりと話してくれた。

ステイ中も、話の内容が分からなくて曖昧な返事をする、冗談まじりで、「あなたは分かってないでしょ」と笑顔で言っただけは、スピードを大幅にダウンさせて説明してくれるのだった。終わりには、「分かった?」と、いつも念を押してくれる「気配り」がうれしくて、そのつど、「不安」が「期待」に変わっていくのを肌で感じる事ができた。こうした体験を重ねるごとに、少々英語が分からなくても尻込みせず、思ったことは積極的に口にしようと、決意した。今ふり返れば、自分でもびっくりするほど、それを実行できたなど、自信をもって言える。心配や不安を払拭できるのは、ほんのちょっとした気配り・心配りなのだ、ということ、今回、実体験できたのが、一番の収穫だったかもしれない。

ところが、全てが楽しいことづくめで終わらないのがホームステイだ。失敗も一度や二度ではない。道に迷って門限に遅れそうになったとき、気持ちが整理できないまま電話をしたところ、「電話をしてくれて、ありがとう。気をつけて帰ってきてね」と、やさしく対応してくれた。

一番の大失敗は、家の鍵が鍵穴から抜けなくなったことだ。ロビンは、私が登校す

る前に職場に向かうので、鍵は私がきちんとかけなければならなかった。その日は、八方手を尽くしても、鍵が抜けない。ひねっても、叩いても、ガンとして抜けない。すると、突然、セキュリティーの警報が鳴り出した。焦れば焦るほど、警報器の音が大きく聞こえる。ロビンに電話をかける手も震えている。うまく説明ができないでいると、彼女は仕事場から大急ぎでタクシーで駆けつけてくれた。するとどうだろう。ロビンが鍵に触れるなり、鍵はいとも簡単に鍵穴からするりと抜け出たのではないか。あれほど七転八倒したのに、ロビンの手は、まるでマジックを見ているよう。私は、申し訳なくて、『sorry』を繰り返すばかり。ロビンは、うろたえている私をタクシーで学校まで送り届け、職場に戻って行った。その日の昼休み、ロビンからメールが届いた。「今日のことは、気にしなくていいよ。もう一度、練習しようね。よい一日を!」。彼女は、いつも私のことを目にかけてくれている。

この件に限らず、何回となくロビンの心配りに救われた。失敗談にはコト欠かないが、そのたび解決できたのは、英語が分からなくても、焦っても、恥かしくても、きちんと報告し、謝罪し、感謝の気持ちを伝えることができたからではなかったかと思える。そうした環境をつくってくれたのは、言うまでもなく、ロビンの「目配り・気配り・心配り」のお陰だと、感謝の気持ちでいっぱいになった。

最終日の夜、「ここにいたい。ずっといたい。ロビンと別れたくない」と、日記に記した。その後、ロビンに感謝の気持ちを伝えたくなり、ごく自然にシャワールーム、洗面所、トイレ掃除にとりかかっている自分がいた。このときほど素直な気持ちで、幸福感に満ちて掃除をしたのは生まれて初めてのことだった。

最後の夜、スーツケースに詰めこんだお米と海苔で、ロビンが大好きなおにぎりを作った。その時のロビンの笑顔は、飛び切りのお土産となった。

今回のホームステイを通して、多くの人々のやさしさに触れ、心が洗われたような気がする。英語力の足りなさや世界的な視野の狭さも痛感した。それ以上に、「もっと知りたい、学びたい」という積極的な気持ちが生まれたのも、新しい発見だった。この二週間でこんなに沢山の体験ができるとは、まさに想定外の喜びだった。

<受けるより与える方が幸せである>

これからは、この言葉を私が実行する番だ。

銀賞

アメリカで得たもの

萩光塩学院高等学校2年

中司 優里(なかつかさ ゆり)さん

私は学校の教室に貼ってあった青少年交換留学プログラムのポスターを見て、すぐに応募を決めました。四年間、学校で勉強してきた英語を役立てたいと感じたからです。また、「他の国の人たちと話がしてみたい」「他国の文化を体験してみたい」と思ったからです。最初は、私は不安や緊張で胸がいっぱいでしたが、準備をしていく内に期待と楽しみに変わっていきました。

無事、留学先であるネブラスカ州オマハに着いて、アメリカでの生活が始まりました。三日後にはエルコーン高校に通うことになりました。高校では、日本との違いにカルチャーショックを受けて、毎日が新しい発見の連続でした。授業では、生徒たちは自主的に発言や質問をし、時にはグループに分かれて、一時間かけて社会問題について討論することもありました。日本人はついつい恥じらいが前に出てしまいが、彼らはしっかりと自分の意見を発表し、たとえ小さなことでさえも、気が済むまで追求します。私は彼らの積極的な所に魅力を感じ、私もそうでありたいと思いました。

三月十一日に日本で東日本大震災が起こった時には、ホストファミリーや友達、先生、今まで話したことがなかった人たちでさえも、「あなたの家族は大丈夫？」と心配してくれて、私は彼らの優しさに涙が出てきました。さらに、高校の日本語クラブが募金活動やチャリティーコンサート行った時には、生徒や先生、保護者など、様々な人が積極的に募金をして協力してくれました。こうした高校でのボランティアだけにとどまらず、オマハ中で様々なチャリティー活動が活発に行われていて、私は感銘を受けました。

逆に、私は日本を離れてみて、アメリカの文化を学ぶと同時に日本の良さをたくさん発見することができました。ある日、はじめて友達と一緒にファストフード店に行った時に、アメリカ人の店員のやる気のない態度に驚きました。勤務中に他の店員とおしゃべりしていたり、ガムを噛んでいたり、携帯電話でメールをしていたりと、日本の店ではあり得ない光景でした。また、友達と一緒に遊ぶ約束をされていて、時間通りに待ち合わせ場所に行っても誰もいません。その十分後に、ちらほらと人が来て、最終的にみんなが集まったのは待ち合わせ時間の約二十分後でした。私はこのような

経験をして、日本人は礼儀が正しく、気遣いができることに改めて気付きました。これは日本においては気付かなかったことです。

萩の松下村塾で多くの若者を育てた吉田松陰先生は欧米諸国の知識を学ぼうと、死を賭してでも密航しようとしていました。それは日本のためを思っただけの行動でした。私は、松陰先生には日本人としての使命感だけでなく、その心の奥には純粋な好奇心があったと考えます。その時代には、外国に行くことが極めて大変でしたから、現在の私達の若い世代は自由に海外留学ができて、本当に恵まれていると思います。近年、ニュースの中で、日本人留学生が減っていると報道されていました。また、学校の授業でも日本人生徒は消極的な傾向にあると思います。一般的に、授業中に自主的に発言しなかったり、他人の意見に合わせたりと、自分を表に出そうとしていないような気がします。日本人の挑戦しようとする心や探究心が減ってきているのではないのでしょうか。

留学をして、一番強く感じたことはアメリカ人の積極性、フロンティアスピリットと、異文化に対する寛容さ、そして他者への優しさです。私は留学中に、周りの人々に支えられて生きているということを実感しました。アメリカの人々のおおらかさと優しさに触れて、私は忘れかけていた「感謝する心」や「思いやり」を、改めて大切にしなければならないと気付きました。また、私は帰国してから授業でも進んで発言するようになり、人の前でスピーチする機会も増え、大きく変わった自分を感じています。留学で培った積極性や自己表現力は、日常生活でも非常に役立っています。この経験を活かし、好奇心を持って、様々なことに挑戦する気持ちを失わないのと同時に、アメリカ人の優しさを忘れないで、何か人のためにできることを少しずつ実践していきたいです。

佳作

「私の国際交流」

県立下関中等教育学校6回生

大久保 奈緒(おおくぼ なお)さん

私は昨年秋、慶尚南道友好交流事業に参加しました。山口県内の学生十一人と一週間を共に過ごし、韓国の学生との交流を行ったり、日ごろの学校生活ではできない、たくさんの貴重な体験を韓国で積むことができました。自分の視野が大きく広がり、考えていた以上に得るものが多い旅となりました。

出発の日は、「これから体験すること」への期待と、「友好交流団の一員としての責任をきちんと果たすことができるのか」という不安が入り混じった複雑な気持ちでした。行きの関釜フェリーの船内では、高校生交流会で披露するダンスの練習にみんな汗を流しました。また、それぞれの学校のことや、これから始まる旅のことなどを夜遅くまで話し、もっていた不安も自然と解消されていったような気がします。

韓国に到着すると、すぐに現地の教育庁を表敬訪問し、次に韓国の大手電機メーカーの見学を行い、韓国の最前線を知ることができました。

そして待ちに待っていた一つ目の学校訪問がありました。訪問校である「馬山合浦高等学校」に到着してまず驚かされたことは、休憩時間であるにもかかわらず、学生たちがたくさん外に出て歓迎してくれたり、窓いっぱいになるくらいに顔を出し、日本語で積極的に話しかけてくれたりしたことでした。私はこの学校訪問を通して、日本と韓国の違いを二つ感じました。一つ目は、日本と韓国はとても近い国なのに、日本人は韓国人に比べてシャイな部分がとても強いということです。私の学校には、毎年のように韓国や中国の学生が来校しますが、恥ずかしいという気持ちが前面に立ち、韓国の高校生のようになかなか積極的に自分から相手の国の言葉で話しかけることができません。コミュニケーションをとるのがとても難しく、時間がかかったことをよく覚えています。二つ目の違いは、この学校は午前八時前に授業が始まり、食事は学校で済ませ、深夜一時まで勉強する学生もいるなど、勉強に対する意識が非常に高いということでした。また、成績上位の学生だけの自習室もあり、学生同士で刺激し合いながら勉強していました。今回の訪問中に、まさか韓国の学生の姿を見て、勉強に関する刺激を受けるとは思いませんでした。私も韓国の学生に負けないように、勉強をがんばろうと思うようになりました。

2つ目の訪問校である晋州機械工業高校では、行きの船内で練習した「よさこい」

を披露しました。また、韓国の学生とペアになって学校の見学をしました。一緒に工作をしているとき、その子は私にもわかるような韓国語で話してくれたり、電子辞書も巧みに使って、積極的にコミュニケーションをとろうとしてくれたりしました。会話をリードしてもらったおかげで、普段日本の友達とするような好きなタレントの話や、ボーイフレンドの話もしました。私は、「お互いの国の言葉が完璧に話せなくても、相手のことを一生懸命理解しようとしさえすれば自然に打ち解け仲良くなれるんだ」と、改めて感じました。

私の夢の一つに、幼いころから続けている日本舞踊をいろいろな国の人に見てもらい、興味をもってもらうということがあります。そのためには韓国の学生のように、自分から積極的にコミュニケーションがとれるようになりたいと思いました。世界中の人々が幸せな毎日を送ることができる日はすぐには来ないかもしれませんが、こうしてお互いの国の歴史や文化、生活の様子を知り、解り合うことで、お互いを思いやる気持ちが生まれると思います。そして、争いは減り、平和な世界づくりのための小さな一歩になると私は思います。

佳作

自分に課せられたもの

高水高等学校2年

村上 愛(むらかみ あい)さん

昔から果てることのない争い。それは世界各地で今も続いている。争いは、これからも続くのだろうか。

私は捕鯨問題に興味がある。初めてこの問題に触れたのは、高二の現代社会の授業時間だった。教科書の欄外に「文化的多様性を維持しようとする考え方と、生物多様性の観点から環境保護を主張する見方の衝突」と小さく書いてあった。私は思わず「説明はこれだけか!」と驚くと同時に「もっと知りたい」欲求に突き動かされた。それから間もなく、偶然にも捕鯨問題のドキュメンタリー番組をテレビで視聴することになった。初めて知った現実には涙がでた。

それは文化や考え方の違いから生まれる人と人との隔たりを見た瞬間だった。交りあうことのできない人間同士の憎しみの応酬であった。

今年七月、市のプログラムに参加してアメリカで十六日間ホームステイをしてきた。出発前、「アメリカ人の捕鯨についての考えを知ること」と「アメリカの文化を存分に体験すること」を目標に掲げ、日本を旅立った。

アメリカに到着するやいなやホストファミリーの人が猛烈なハグで出迎えてくれた。

「これがアメリカだ」とわくわくした。それから毎日、ホストファミリーはもちろん、その友達や近所の人と過ごし、コミュニケーションの醍醐味を味わいながら、たくさんの経験と学びを得ることができた。本当に充実した日々だった。と同時に私自身も、日本文化や日本人の考え方についてでき得る限りの発信ができたと思う。

例えば、ホストファミリーと一緒に外食した時だった。家族はみんなたくさんの料理を注文していた。「アメリカ人はこんなに食べるの」と感心していた私は、あとになって驚かされた。始めのうちは順調に食べこなしていたのだが、さすがに終盤ともなると、パタリと手が止まり、会話を楽しむのみとなった。最後は多くの料理が皿に残っていた。

「余った料理はどうするの?」と聞くと「このままよ。たいていのアメリカ人はこうよ。」とあっけない返答だった。でもそれは日本人の私には受け入れがたいことだった。そこで「大抵の日本人はそんなに料理を注文しないし、仮に余ったとしたら、

出来る限り容器に入れて持って帰るんだよ」と伝えた。すると、「そうだね。容器をもらって詰めて帰ろう。」と言ってくれた。

それから何度か外食したが、いつも余った料理は持ち帰ることになった。自分の想いが伝わただけでなく、それが正当なものと評価されたようで本当に嬉しかった。資源大国のアメリカ人は資源を大切にしない傾向があると聞いていたが、それは誤解だと今の私は主張できる。

ところが、捕鯨の課題の方は、結局大した成果もなく、進展もせず終わってしまった。

日本では第二次世界大戦以前から長く鯨漁は行われていて、唄や絵巻物と共に歴史を刻み続けてきた。なかでも戦時下の日本人にとって鯨は、比較的容易に大量に手に入れられるタンパク源として、また鯨油やヒゲは生活資材として欠かせないものだった。そんな日本の鯨漁文化は今も受け継がれていて、多くの人々の生活の支えとなってきた。

現在、世界中から注目を浴びているのが日本の調査捕鯨だ。鯨が海洋に与える影響や生態系構造の解明などを目的に行われている。しかしそれには多くの年月と鯨の捕獲が必要となる。解体調査後、鯨は法に則り食用として売りに出される。

そんな日本に対し、オーストラリアの世論は捕鯨絶対反対に傾いてきた。鯨はランクの高い海の生き物と捉えられ、神秘的な動物であり、過去の乱獲の反省から環境保護の想いが非常に強い。一方、アメリカはかつての捕鯨大国であるが、今は捕鯨反対国に転じながら一部民族の生活捕鯨を認めている。

捕鯨に関して言いたい事は山ほどあった。しかし、語学力の乏しさからうまく伝えることができないばかりか、誤解を招くのではないかという恐れから、私は二の足を踏んでしまっていた。あのホストファミリーとならももっとも理解を深められたに違いない。それがわかっただけに悔しくてたまらない。

「鯨に対して法律が必要ならば、他の動物にも法律を適用すべきだ」と「絶滅しそうならば発展したテクノロジーで鯨を増やせばよい」というのが、私がこの家族から聞き出せた意見のすべてだった。

バースデイパーティーで引っ込み思案な私を温かく迎え入れ、コミュニケーションの大切さを自然体で教えてくださったホストファミリーは、私のアメリカとなった。そこでは自分の未熟な部分にもきちんと向き合うことができた。私はもっとももっと勉強し、自分を向上させたいと思う。この世界の中で私にできることは何か、素直な心で考えたい。

佳作

世界という宝石箱

慶進高等学校2年

潘 佳真(ばん よしまさ)さん

今年の夏、私は修学旅行でシンガポール・マレーシアへ行き、一生忘れることのない経験をした。これまで私は海外へ行ったことがなかった。そのせいか、出発前夜は緊張してなかなか眠ることができなかった。まるで新しい学校へ入学する時のように。そう、私にとって海外は、全てが未知の世界だったのだ。現地に到着してから、絶え間なく飛び込んでくる新しい発見で、気分はいつも新鮮だった。事前学習の時のイメージなど遥かに越え、目の前の光景が嘘のように感じられた。旅を終えた今、私の心の中には二つの、深く刻み込まれたものがある。それは、シンガポール市内とマレーシアでの学校訪問に他ならない。

シンガポールは、マレー系、インド系、華僑と様々な民族が分け隔てなく、生き生きと共存している。私は、多民族国家というものを初めて肌で感じた。道行く人々を見るだけでも、多種多様な発見があり、非常に興味深かった。また、言語において感銘を受けることがあった。シンガポールの人々のほとんどが、母国語と公用語である英語を話すことができるのだ。

この中に、さらに日本語など他の言語も話せる人が多くいる。つまり、バイリンガルやトリリンガルが普通にいることになる。私は、この言語能力の高さに唖然とした。と同時に、言語に精通した者の風格に魅せられた。新たな言語を習得することで、コミュニケーションの幅が広がる。このことを改めて実感した。

マレーシアの学校は最南端に位置する。言い換えれば、シンガポールの国境を越えてすぐの所になる。つまり、多様な民族が共存している。交流会はこの点を利用した、他民族による様々な伝統芸能の披露で幕を開けた。演じるもの全てが洗練されており、きらびやかだった。自分たちの民族と伝統芸能、つまり文化に対する誇り、情熱、そして愛という私たちの忘れかけているものを感じることができた。そういった気持ちを大切にできることが、少しうらやましかった。そんな折、ついに生徒間の交流が始まった。果たして、英語を聴き取ることができるのだろうか。そんな不安と、自分の英語はどこまで通用するのだろうかという少しの期待で、胸がいっぱいだった。どう話しかけようかと躊躇している間に、相手から話かけてくれた。肝心の英語が聴き取れ、通じると、一気に大きな自信へと繋がった。そして、飽きることなくずっと話

し込んだ。どの生徒も皆、優しく朗らかで、純粹で素直だった。それが、ただただ嬉しかった。しかし、あっという間に別れの時は来た。共に過ごしたのは半日だけだったのに、こんなにも寂しい。この寂しさは、私が貴重な出逢いを、大切にできたことの証拠だと思う。

今回の旅を通じて、英語の有用性、異文化の理解、そして様々な人々と出逢えたことは、海外でしかできなかったことだと実感した。テレビやインターネット、どんな情報媒体を通してでも分からない。実際に行って、肌で感じなければ何も得ることができない。私は今回の旅が人生の糧となり、世界を一気に広げてくれた起爆剤であったことに対して、本当に確信しているし、感謝している。

今、私は言いたい。海外は悪い人で満ち溢れ、治安が悪そうといった先入観を持っている人に。その考えはすぐにでも捨てて欲しい。そして、世界はまだ自分の出逢ったことのない価値観を持った人々で、満ち溢れていることを知って欲しい。海外は言葉が通じないからと思っている人、勇気を出して一歩踏み出して欲しい。きっと英語なら自分の意志は伝わるはずだ。たとえ、伝わらなくても身振り手振りで必ず伝わる。自分の殻に閉じこもってばかりいないで、一歩踏み出そう。その大きな一歩が、必ず人生を大きく変えてくれる。もちろん、良い方向に。私は、一人でも多くの人々に一歩を踏み出してもらいたい。そして、自分で行ってこそ掴める大切なものが、たくさん転がっているはずだ。さあ、飛び込もう。世界という宝石箱へと。

佳作

国と国との距離 心と心の距離

サビエル高等学校1年

小西 こなつ(こにし こなつ)さん

この夏休み、私は外国に行きたいという軽い気持ちでオーストラリアのホームステイに参加することに決めました。

出発の日の前日も、あまり難しく考えず、これから起こるであろう素敵な出来事に胸を高ならせていました。

そして出発の日。始めは期待と喜びではしゃいでいた私ですが、疲れが出てくると共に、今まで隠れていた不安が少しずつ姿を表しはじめました。

そんな中、無事にオーストラリアに着いた私たちは、これから2週間お世話になるホストファミリーの方々と会うべく、まち合わせ場所の学校に向かいました。

学校に近づくにつれて、私は疲れと眠気と寒さで気が滅入ってしまっていました。

着いてみると、そこにはたくさんのホストファミリーが、とびきりの笑顔で私たちを迎かえてくれました。とてもすてきな笑顔だったので、私のかかえていた不安が少しとけたような気がしました。

さて、私のホストマザー、ウーツとその娘のキーラは親子そろってちゃめっ気のある人たちでした。疲れている私にニコリ笑いかけながら、「雨が強いから、車まで走るわよ。ちょっと遠いけど、大丈夫ね。」と言ってピューと走って行ってしまいました。私も娘のキーラに背中を押されながらがんばってついていきました。

このおかげで私の不安もほとんどとけて、緊張もそこまでせずに、あいさつをかわすことができました。

また、途中でウーツが私に、「今日は疲れたでしょう。帰ったらすぐにシャワーをあげなさい。明日は特別におそくまで寝てていいわよ。」と言ってくれました。そのやさしさと気配りに、今までかかえていた不安のせいか、少し涙が出そうでした。

次の日の朝は、私もすっかり元気をとり戻し、朝食を食べていたら、ウーツが、「今日はあなた一人で学校に行ってもらおうわよ。」と言って、手書きの地図をわたしてくれました。

その地図は、通りかかるお店の名前や、分かりやすいように小さなイラストも描いてありました。しかしさすがに初日から電車を使って町中を通って学校に行くのは、きついなと思っていたら、「心配しなくてもいいわよ。ここではめったに迷子になら

ないのよ。みんな親切だからね。」と言ってくれました。

不安をたち切れぬまま、家を出る時間がきてしまいました。

一緒について来てくれないかと思いながら駅に向かいました。

駅に着くとウーツは近くにいた見知らぬご老人夫妻に、「～まで行きますか？この子今日がはじめてなのですが、～まで行ったら降りるように言ってくださいますか。」と頼みました。

初対面だし、そんな面倒なことを引き受けてはくれないだろうと思っていた私に、そのご老人の夫妻は、すてきな笑顔で「いいわよ。」と即答でびっくりしました。とてもうれしかったし、自分は何も得をしないのに、笑顔で請ってくれる人がいるということに感動していました。

その方々のおかげで私はきちんとした駅でおりることができました。

その後の道のりでも迷子になったのですが、その度近くにいる人に聞いて、時には知らない人が、「どうかしたのかい。」と声をかけてくれて、何一つまちがえることなく、学校に着くことができました。

この一日だけでも、私はたくさんの人たちと話し、笑い、助けられました。

おどろいたことに、この日道を聞いた人は、誰一人として、「知らないよ。」や、「自分で探せば。」などのなげやりな感じの人がいませんでした。

分からなくても、一緒になって探してくれたり、なやんでくれたり、「がんばれよ。」と元気づけてくれたりと、本当に本当にやさしい人ばかりでした。

私はぜひこのやさしさを日本でも広めたいと思いました。

嫌な気持ちをせず人に道が聞けたり、気軽に助けたり、助けられたりする環境を。

そうすることによって、私がオーストラリアで人の輪を広げられたように、日本でも他の人や、観光者の輪を広げることができ、幸せな気持ちになれるから。

この、気軽に参加したホームステイで、私は忘れかけていた人と人とのつながりの輪についてあらためて見直すことができました。

これからは私も、面倒だからといって逃げるのではなく、自分から関わって、人の輪、心の輪を広げていきたいです。

佳作

はじめての国外脱出

サビエル高等学校1年

竹内 彩(たけうち あや)さん

生まれて初めて、国を出る。行き先は、あこがれの国、韓国だ。小学生の頃から韓国のドラマを見たり、韓国音楽にはまったりと、人並み以上に韓国が好きだった。今までは、遠くから眺めるだけだったが、実際に足を踏み入れ、直接韓国の文化に触れることができるのだ。歴史やお国柄の雰囲気など、すべてを直接肌で感じるができる。胸が高鳴り、わくわくする。もちろん、言葉などの不安材料もたくさんあるが、出発する日までが、待ち遠しくてならなかった。

今回、韓国を訪問できたのは、山口県山陽小野田市日韓親善協会長の薦めによる。全国募集の20名の高校生と一緒に、青少年交流訪韓団の一員として参加し、とても楽しく、有意義な時間を過ごすことができた。なかでも韓国の人々の優しさと温かさが身にしみるほどうれしくて、感謝でいっぱいだ。

初日に、韓日親善協会中央会の会長である金守漢氏のもとへ表敬訪問した時のことだ。案内された部屋に入った途端、金氏と日本の歴代総理大臣が握手をしている写真が壁一面に貼られているのに気がついた。やはり日韓は、昔から関係が深かったのだが、それには、よい時があれば、よくなかった時もある。今でも、領土問題が解決されないままになっており、「お互いが理解し合い、協力し合わなければならない」、と金氏が強調された言葉は、帰国後の今も心に残っている。これからもずっと頭から離れることはないだろう。

次に印象に残っていることは、扶余を訪ねた時のことである。昔、百済が滅亡した日、女性たちが忠誠を守るために飛び降りた舞台。急な斜面を何メートルも上がり、たどり着いた先は、絶壁のような場面だった。

そこで少し休息し、下ろうとした時、後ろから誰かに声をかけられた。ふり返ると、お年寄りの男性が、ニコニコしながらこちらを向いていた。彼は韓国の方で、今、日本にとっても興味があるという。特に、日本の花が好きらしく、花の名前をどんどんあげる表情は、とてもいきいきしていた。何よりも、「日本が好き」と言ってもらえたのが、嬉しかった。

ホームステイでは、全南大学生と、その友人も交じって、ショッピングのため、繁華街へ向かった。その時は、バスで移動したのだが、スピードの速さと、急ブレーキ

の多さには驚くばかりであった。立っているのも困難。しかし、周りを見回すと、皆は平然としている。「こんなの普通よ」と言わんばかり。余裕の表情を浮かべていたのには、仰天した。

バスを降り、繁華街を歩き始めると、何度も人にぶつかる。相手は、謝りもしなければ、文句も言わない。最初は、このことに戸惑ったけれど、回数を重ねるうちに、これは日常茶飯事のことだと、悟る。韓国は、自分が何をしようが、他人が何をしようが、全く気にしない。ある意味で、自由の国なんだ、と妙に納得した。

買い物を終え、大学生の家に帰ってくると、お父さん、お母さん、弟さんが、いっせいに迎えてくださり、恐縮するというよりは、感激で胸がいっぱいになった。暫くはお土産を渡したり、他愛もない話をしていたのだが、そうしたわずかの時間の中でさえ、暑いからといって、ずっと扇子であおいでくれたり、マッサージをしてくれたりと、とても親切にしてくださった。少ししか経っていないのに、すぐに親しくなることができ、最初に抱いていた不安は、とっくに吹き飛んでいた。

韓国の人々は、想像をはるかに超えて、何に対してもオープンで親しみやすく、ますます韓国の魅力にとりつかれてしまった。韓国語はまったく分からないけれど、通りすぎる人に挨拶をすると、笑顔で返してくれる。道を尋ねると、カタコトの日本語を使って、必死に教えてくれる人々。出会った人達はみな、優しい人ばかりだった。

訪れて初めて知ることが多く、まだまだ勉強不足であることも痛感させられ、これからの課題が与えられたような気がする。

国同士の問題は、今や若い私たちが解決に向かって行動していかなければならない。韓国で過ごしながら、この思いが日に日に強くなっていった。

今回、韓国に滞在中、「감사합니다・カムサハムニダ（ありがとう）」を、どれだけ使ったことだろう。常に誰かに支えられ、助けられていた気がする。今回の体験をもとに、今度は、私が誰かを支え、助けたい。そんな思いにさせてくれた体験に、心から感謝している。

佳作

「国際交流の大切さ」

萩光塩学院高等学校2年

山根 真悟(やまね しんご)さん

僕は、修学旅行で、シンガポールとマレーシアに行きました。初めての外国ということで、楽しみでもあり、不安でもありました。それは、国それぞれの文化や生活習慣が異なり、日本では普通のことでも、外国では、その行為が罪にとわれることがあるからです。それで僕達は、シンガポールとマレーシアの文化や習慣をあらかじめ学習して、修学旅行に出かけました。

この修学旅行には、大きな目玉がありました。それは、現地の高校生との交流です。交流した学校は、マレーシアの首都クアラルンプールにあるウトラ高校でした。マレーシアは多民族国家です。そのため、この学校では、中国系やマレー系、インド系など、さまざまな民族の学生達と同じ屋根の下で、勉強していました。

マレーシアに到着した翌日、最初に出かけたのは、ウトラ高校でした。学校へ行ってみると、僕達は、マレーシアの高校生の温かくも迫力のある大歓迎をうけ、とても感動しました。マレーシアの学生達は、初めて会う僕達に、すごくフレンドリーに接してくれました。普通、僕達日本人は、初めて会う外国の人には、少し警戒心を持つと思います。しかし、マレーシアの人は、分け隔てなく接してくれて、すぐに緊張も解け、うちとけることができました。

交流会では、ウトラ高校の人とペアを組んで、話をしたり校内を案内してもらいました。僕とペアになったのは、中国系の女の子でした。中国系なので、最初僕は、彼女が中国語で会話をしてくるのかと思いました。しかし、彼女は、流暢な英語で話しかけてきました。英語があまり得意でない僕ですが、彼女と何とか会話をすることができました。それで僕は、英語の大事さと大切さを改めて知ることができました。また、英語の単語に、身振り手振りを交えれば、結構、相手に気持ちや言いたい事が、しっかり伝わるんだなと思いました。

また、高校生の中には日本語を勉強している人もいて、少しでも日本語で話そうと、積極的に話かけてきました。僕は、その気持ちがうれしくて、涙が出そうになりました。また、話かけてくれる人、一人一人が僕の目をしっかり見て話してくれるので、とても気持ちがよかったです。

また、交流の中で、高校生たちによるマレーシアの伝統的な踊りを見る機会があり

ました。マレー系・中国系・インド系で、踊りや衣裳もまったく違い、優雅なものから、見ていて楽しいものまで、いろいろありました。このように、異なる文化や習慣の人々が一緒に学び、一つの国を作り上げているマレーシアという国に、僕は新鮮な驚きを感じ、同時にとても魅力を感じました。

出会いがあれば、必ず別れが来ます。僕達も帰らなければならない時間がきました。ほんのちょっとした間でも、僕達は、マレーシアの高校生と友達になることができ、別れはとても辛かったです。こんなに仲よくなれたのも、マレーシアの高校生の明るさや優しさがあってこそなので、本当に感謝しています。

僕は、この国際交流を通じて、学んだことがたくさんあります。

一つ目は、英語の大切さです。僕は正直、「僕は日本人だから英語はいらない。」と思っていました。しかし、言葉は人々を結びつけるすばらしい道具であること、特に英語は世界の共通語であることを再発見しました。

二つ目は、笑顔で接することの大切さです。マレーシアの高校生は、話をする時、いつも楽しそうに会話をしていました。僕は、緊張してしまうと、いつも不機嫌そうな顔になってしまいます。笑顔は、その場の雰囲気や和ませ、会話もスムーズになります。これからは、マレーシアの人達のように、誰に対しても、フレンドリーに明るく接していきたいです。

僕は将来、イタリア料理のシェフになりたいと思っています。料理とは、その土地と深く結びついています。そして、その土地や文化を知ることが、おいしい料理を作ることにつながると 생각합니다。僕は、今回の修学旅行で得た言葉と笑顔の大切さを常に忘れず、実際に海外にも出かけて、料理を勉強し、一流のシェフになりたいと思います。

2011年度募集要項

第51回「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」山口県大会

■テーマ

作文の題目は、「世界の平和と安定のために国連がすべきこと」、「世界の自然災害に対して国連と日本は何ができるか」又は「もしも私が国連職員なら」のうちいずれか一つとします。

なお、作文の内容は、学校、家庭、社会などにおける作者の研究や体験あるいは実践などに基づいて述べたものとします。

■原稿制限

400字詰め原稿用紙4枚以内（原稿には、住所・氏名・学校名・学年・年齢を明記してください。）

■賞

最優秀：1名 金賞：1名 銀賞：2名 佳作：6名

第18回「高校生による国際交流体験感想文コンテスト」

■テーマ

題は自由。感想文の内容は、修学旅行や市町村による姉妹都市への親善訪問、留学生との交流やホームステイ等の直接体験に基づき、その感想を述べるものとします。なお、生徒の国際交流体験は、概ね平成22年7月から平成23年8月までの間のものとします。

■応募資格

高等学校生徒（全日制、定時制、通信教育）及び高等専門学校生徒（ただし、3年生まで）

■原稿制限

400字詰め原稿用紙5枚以内（原稿には、住所・氏名・学校名・学年・年齢を明記してください。）

■賞

最優秀：1名 金賞：1名 銀賞：2名 佳作：6名

共通事項

■締切

平成23年9月5日(月)(必着)

■審査と発表

主催団体において審査し、10月下旬に発表します。

■応募作品の取り扱い

①応募作品は返却しません。②入賞作品の著作権は、主催団体に帰属します。③作品は自作・未発表のものに限ります。④中学生による作文の上位入賞作品については、全国コンクールへ出品します。

■個人情報について

応募者の個人情報については、応募者の選考、連絡のために利用します。これらの目的の他に応募者の個人情報を利用することはありません。

■応募先・お問い合わせ先

〒753-8501 山口市滝町1-1 山口県地域振興部観光交流局国際課内
日本国際連合協会山口県本部 TEL 083-933-2343
<http://www.unaj-yamaguchi.jp/>

【国際理解・国際協力等各種コンテスト表彰式】

2011年11月19日(土)に開催した「国連フェスタ2011」において、優秀作品の表彰式を行いました。

※イベント詳細については、こちらをご覧ください。

http://www.unaj-yamaguchi.jp/act/festa2011_houkoku.html

平成23年11月発行

発行元

日本国際連合協会山口県本部

〒753-8501

山口市滝町1-1

山口県国際課内

TEL (083) 933-2343



日本国際連合協会山口県本部